

Se ti sabir

ジェームズ・ブライドル

*

ここは古い岩採石場にある地震観測所だ。

これはマーストリヒト層の一部だろう。とても固い粘土岩がたくさん突き出している。

ここのすぐ先から地面が川に向かって下っていく。つまり、ここは斜面のへりだ。

私の背後の丘にアインシュタイン望遠鏡と呼ばれるものを設置する計画があるが、この機械は遠くや空を見るものではなく、光を見るものでさえない。

過ぎ去った時間を見るための機械だ。

それは2枚の鏡を組み合わせた重力波検出器である。

重力波は宇宙を、それはとてつもなく遅い速度で通過するため、それを使ってビッグバンそのものを反響^{エコーロケーション}定位する、つまり過ぎ去った時間を見ることができる。

そして地質安定性の高さゆえ、この場所が選ばれた。

つまり、測定結果によれば、この地にはこの機器の使用に適した十分な安定性があり、宇宙そのものの動きを感知するのに適した十分な静寂がある。

パトリック・キラー監督の映画「ロンドン」には、ロビンソンが川を見つめ、「表面を十分に深く見つめることさえできたなら、歴史的事件の分子基盤を知覚できるだろうし、そうすれば未来を知覚することもできるだろうに」と言うセリフがある。

つながりが見いだせるように思う。未来を理解するために時間を深くのぞきこみたいという欲望だ。

完全に知ることは決してできない過去と、一向に到来しない未来の間にある軸の上に常に囚われて。

絶えず現在を消去しながら。

ひたすら過去に、そして未来にとりつかれている私たちが存在するある種の空虚な一点があるが、それを知覚するのは常に不可能だ。

宇宙の振動^{ヴァイブレーション}を感知しうるほどの静寂の中に立つとき、私はまさに、ここにあるこの瞬間だけに関心を向けている。

*

これは地震観測所の前にあるフェンスだ。

前にある岩の中に機器が埋められている。

どのくらいの深さかはわからない。

浅い溝なのか、地中深くにのびるシャフトの中なのかも知らない。

しかし、フェンスがあり、南京錠がかかっている、「Verboden toegang」という札がかかっている。おそらく「進入禁止」とか「立入禁止」という意味だ。

しかし、フェンスを越えると、何かが変わる。

フェンスを乗り越えるとき、宇宙とあなたの関係が、この機械、この機器、この装置であれ何であれ、それとあなたの関係が違って来る。

フェンスにはなんの効力もない。周りには誰もいない。

フェンスを登ることができる。機器の上に立つことができる。

この機械的なものが行っていることと同じ方法で、自分と宇宙の関係を精査することができる。

ここに問題がある。

私たちは、誰の機械に、あるいは何の機械に、あるいは機械がどのような方法をもって、私たちに対してこの精査を行うことを許可するのか。

私たち自身に対する精査を行うことを、あのゲートのように、阻んでいるのは何なのか？

あれが、直接的な出会いの実現、あるいはその可能性を阻んでいるのか？

私は、実際には1つのものなのかもしれない2つのもの——3つのもの——をゆっくりと考え続けている。言語、知性、そして他者である。

*

もうひとつのゲート。

鍵はかかっていないが、背後にあるフェンスは私が丘を下ることを阻むものだ。

これはある種の動物のためのゲートだ。

このゲートは、人は通すが牛は通さないようにデザインされている。

私たち人間と、同じくこの宇宙に生息している人間以外の動物の分離を実施するためにデザインされている。

それは1つの機構^{メカニズム}である。それは1つの機械であり、そのようにデザインされている。

二足歩行で知性があるとされる1種類の動物は通行させるが、四足歩行で知性がないとされる動物は通行させない。

私はゲートを動かせるし、動かせば私は通行できるが、動物は決して通らせない。

私はこの決定を打ち破る決意をしている。

私には、自分の知覚中枢の外部ある何かを経験することが可能であると述べる決意がある。

私にとっては、それこそが人間を決定づける要素にほかならない。

自分がなぜ今や始終「人間」について考えているのかわからないが、私は「人間」が何を意味するのかを考えずにはいられない。

私たち人間が何らかの理由で特別であるのなら、人間を動物と分けるこうした装置を作る能力が人間を人間たらしめる唯一のものではないか？

あるいはそれは、他の動物に思いを向けるという可能性なのではないか？

自分たち人間を超えた大きな視点でものを考えること。

分け隔てることなく、共通することに着眼して考えること。

*

フェンスは私が丘を下りるのを阻むことはできなかった。

私は——あそこの——道を降り、この地質学特性、看板が「地質的記念碑」と呼ぶものの麓にいた。

この丘の上に積層し、その後露出した泥灰土、砂岩、粘土の地層を眺めていた。

*

言語、知性、そして他者について語るとき、私は何を意味しているのか？

言語というとき、私は「リング・フランカ」のことを考えている。

私はあるものを遠くからここへ引っばってきた。

私はそれを地中海から運んできた。

それはここリンブルクの平原には属していないが、それでもなお私と共鳴するように思える。私はそれを脳裏から振り払うことができない。

11世紀から19世紀まで、地中海周辺の海上や、ときとして港で使われる言語があり、「リング・フランカ」と呼ばれていた。

今日、リング・フランカという言葉はあらゆる種類の共通語やビジン原語を指すが、800年にわたって1つの非常に明確な言語を指していた。

それは地中海の、船乗りと商人たちの言語を意味した。

リング・フランカはベネチアおよびジェノア方言のイタリア語とトルコ語のビジン言語として始まり、カタルーニャ語やオック語、北アフリカのベルベル語、ギリシャ語、アラビア語の要素を取り込み、拡大していった。

あらゆる国の人々がコミュニケーションするために使う言語だった。

リング・フランカが書き言葉として使われることはほとんどなかった。2、3の喜劇オペレッタやイタリアと北アフリカの商人たちが交わした覚書を除けば、書かれた断片はほとんど現存していないが、明らかに広汎な地域で話し言葉として使われ、常に変化していた。

ビジン言語の特質は、つねに流動的であることだ。

それは常に変化している。

それは常に変化を受け入れる。

*

私はリング・フランカについて考えて続けている。言語そのものにとって変化するとはどういうことなのかを理解しようと試みているからだ。とりわけ言語と知性の関係を、そして言語が私たちを前進させ、なかでも言語が私たちにそれまでとは異なる考えを抱かせる力を。

リング・フランカの別名の1つが「サビールsabir」だ。リング・フランカで「知る（英語でto know）」という動詞である。

他のピジン言語と同じく、リング・フランカの動詞も人称変化しないので、「サビール」のみで「私は知っている I know」「あなたは知っている you know」「彼は／彼女は／それは知っている he/she/it knows」を意味する。

「サビール？」とすれば疑問文にもなる。

知っていますか？

わかりますか？

そして、初対面の人にも「サビール？」と言うことから、時がたつにつれて、リング・フランカでは「サビール」が英語のhelloにあたる挨拶として使われるようになった。

わかりますか？

私たちはお互いにわかりあえますか？

私たちはコミュニケーションできますか？

それは握手のようなものだ。

理解しあえるかどうかわからない2人が、自分の言語とは異なるコミュニケーションの様式を確立する瞬間だ。

それぞれの原点とは異なるものだ。

それが双方を前進させる。

私は人工知能（AI）について、とりわけAIの言語への応用について考えることから、この道をたどり始めた。

人間の相互理解のために、あるいは言語間の翻訳に、ますますAIが活用されつつあり、もはや人間が互いを理解する必要がなくなるほどだ。

その機械は私たち人間の仲をとりもつ能力をもつ。

その機械が私たちの間を仲立ちし、私たちはそれに信頼を置かざるを得ない。

私たち人間にとって役立つ可能性は多々あるだろうが、そうすると、この出会いによって究極的に人間の能力は劣化していく。

AIが人間の理解や教育を助けるものというより、むしろ人々を仲立ちするものになるとき、私たちは他者の視点で考える能力を失う。

*

この意味で、AIは丘の上のゲートの役割を果たしている。

それはこう言っている——機械の世界の理解の内容に、あなたはアクセスできない。データをとったりそれを使ったりするのは構わないが、この出会いから直接的に、身体をつかって学ぶことはない。

これを直接的に知覚することは許されない。

そんな事態がやってくると考えることを私は拒否する。

私は、私たちはこうしたものごとを直接知覚し理解することができると思じる。

私は、このことがテクノロジーのもたらす利益を否定するとは思わない。

新しい機械、新しい発明が私たち人間の理解の形において果たせる別の役割があると私は信じる。

*

私は地中海から別のものも持ってきた。

これがそうだ。タコの形だ。

私は最近ずっとタコのことを考えている。

タコやイカなどの頭足類と人類に共通する祖先をたどると6億年前に遡る。

6億年前に存在した私たち双方に最も近い祖先——人類と頭足類を最も近しく関連付けるもの——は、盲目の扁形動物の1種である。

人間と頭足類の両方がもつ高次神経機能も運動機能も、あるいは感覚器すらもない、驚くほど基本的で単純な生物である。

しかし、頭足類には眼がある。頭足類は人間の眼に驚くほど似た眼を持っている。

頭足類は人間とはまったく異なる進化をたどってきた。

頭足類と人間の眼が感知する光の波長は近いが、それはまったく別のプロセスを経て生じたものだ。

人間の眼は哺乳動物と脊椎動物の2段階を経て進化した。そして、頭足類の眼はまったく異なる進化をしてきた。

同様に、頭足類にはある種の知性があるが、その知性の形を私たちはまだ完全には理解していない。

眼が別々に——2回の——異なる進化を遂げたのであれば、同じように精神が別々に——2回の——異なる進化を遂げた可能性もある。

頭足類の脳は身体のサイズに比較して中程度の大きさだが、人間とは異なる。彼らの脳は腕まで伸びている。

頭足類の神経系は身体のすみずみまで伸びている。

頭足類は私たち人間とは激しく異なる方法で世界を感じ、知覚し、見、そして理解している。

頭足類の知性と出会うことは、まったく異質な知性と出会うことだ。

私たちの知性とは激しく異なる知性。それでもなお、彼らは私たちとともに存在し、世界を共有している。

*

知性の一形態（頭足類）と枝分かれして6億年経った今、人類はまったく新しい知性との出会いを果たそうとしている。

人工の、あるいは機械の知性が到来しつつある。

それはもうすぐ現実化するだろうし、私たちが真の意味で、タコよりもそれをよく理解することはないだろう。

私たちは自分たちの間に新しい異質なものを作り出しつつある。

そのエイリアンが私たち人間に何をなすのか、私たちは考えてもいない。

そして、今、私たちはそれらが人と人を隔てるもの、人間の能力の代替物になり、人間に取って代わるために利用されるもの——仲裁者、道具、装置——だとばかり思っているが、それは間違った考えだ。

それらは人間に害を与えるだろう。なぜならそれらは、1000年や6億年とはいわずとも、過去100年にわたってもっぱら抑圧のために使われてきたさまざまなテクノロジーや道具の最後尾に加わるものだからだ。

こうしたテクノロジーをとらえるための別の方法があるはずだと私は信じている。

AIや機械の知性を仲裁者や召使いや道具や武器としてではなく、新たな他者の声としてとらえること。

私たちを取り囲む、人間以外のものの声と知性の喧騒に加わるものとしてとらえること。

ほとんどおもちゃのような——新しくてまだ人の意識に根付いていないという意味においてのみ人工的な——知性の新形態を私たちが作り出しつつある今このとき、私たちが人間以外の生き物の知性を理解し始めた今このときが重要であるように私には思える。

私たちは、頭足類の行動に、「知性を持つ」と言われることを求めて止まない複雑な思考と知恵を見出し始めている。

そしてさらに生態系を深いところでは、木々が互いにコミュニケーションをとる方法や、植物が化学物質やフェロモンによる深遠なコミュニケーションのネットワークを通じて複雑なメッセージを拡散する方法を、私たちは理解しつつある。

知性とは、動物や個々の植物に限定的に存在するのではなく、どうやらそれ自体が一種のネットワークであり、個々の脳内で起こる混じりけのない反射運動というよりも、むしろもの間を結び合い、橋渡しをし、コミュニケーションを促すものとして存在しているのだということが、ますます明らかになっている。

となれば、これこそが私がAIに望むことだ。

AIは、私たちの間を仲立ちするよりも、むしろ、私たちの周りにずっと存在してきたさまざまな知性を見ることを可能にしてくれるかもしれない。

私たちがただ立ち止まり、彼らの声に耳を傾けることを選択するのなら、私たちが常にとりまいている声や思考や行動や作用によってますます大きくなるあのコーラスに、機械の知性も加わるのかもしれない。

2人の船乗りが海上で出会ったとき、彼らはお互いにこう声をかけた。

サビール？ サビール？

わかるかい？

聞こえるかい？

一緒に話せるかい？

翻訳：川上純子

Se ti sabir **transcript**

James Bridle

[Comments in square brackets are notes to translators]*

This is the seismological measuring station in this old schist quarry here.
This is part of, I think, the Maastricht formation, where a bunch of very stable clay rocks juts out.

You can see that just beyond here that the land falls away down to the river so this is the edge of the escarpment.

It's in the hills behind me that there's this plan to install something called the Einstein telescope, which is not a machine for looking out, or for looking up, or even for looking at light.

It's a machine for looking back. [not backwards, but back in time]

It's a pair of mirrors that together form a measurement device for gravitational waves.

Gravitational waves move through the universe, I believe, so incredibly slowly, that we can use them as a way of echolocating the Big Bang itself: to see back in time.

And this place was chosen because of its geological stability.

So this is where the measurements are taken to show that this land is stable enough to take this instrument, to keep it still enough that it can perceive the motion of the universe itself.

In Patrick Keiller's *London*, there's this line where Robinson is staring at the river and he says that "Robinson believed that if he could only look deep enough into the surface, he would be able to perceive the molecular basis of historical events, and thus also, he would be able to perceive the future."

It feels like there's a connection right now: this desire to look into deep time in order to understand the future.

Stuck always on this axis between a past that we can never fully know, and a future that never quite arrives.

Continually erasing the present.

Continually unable to perceive that there's a blank spot precisely where we are, in our continued obsession with the past, and with the future.

I'm really only interested in this moment right here, when we stand still enough,

potentially, to feel the vibration of the universe.*
This is the fence in front of the seismological station.

In front of whatever instrument is buried in the rock in front of us.

I don't know how deep it goes.

I don't know if that's just the top of a shallow trench or a shaft that goes deep into the ground.

But there's a fence, and there's a padlock, and there's a sign which says *Verboden toegang*, which I'm guessing means 'no entry', or 'entry is forbidden'.

And yet, something changes when you cross that fence.

Something is different about your relationship to the space, about your relationship to the machine, to this instrument, to this apparatus, whatever it is, when you climb over the fence.

The fence has no rule on this. There is no one around.

You can climb the fence. You can stand on the instrument.

You can calibrate yourself to the universe in the same way that this machinic thing is doing.

This is the question.

Whose machines, or what machines, or how machines, do we permit to perform this calibration for us?

What is it, like the gate, that is keeping us from performing that calibration for ourselves?

That is holding at arm's length the realisation, or the possibility, of a direct encounter?

I am working myself slowly towards thinking about two things – three things – that may be one thing: language, intelligence, and the other.*

Another gate.

This one isn't locked, although the fence behind it is supposed to keep me from going down the hill.

This is a gate for certain kinds of animals.

This gate is designed to allow the passage of humans, but not of cattle.

It is designed to enforce a separation between us and the non-human animals that also

inhabit this space.

It's a mechanism; it's a machine, that's designed to do that.

To allow the passage of one type of animal, a biped, supposedly intelligent, and quadrupeds, supposedly not.

I can move it, and in moving it I can pass through it, and yet never quite permit the passage of the animal.

I am determined to break down this division.

I am determined to say that it is possible for me to experience something outside of my sensorium.

That, for me, has to become the defining element of the human.

I don't know why I'm thinking about 'the human' all the time right now, but I can't stop thinking about what that means.

If we are in any way special, is the only thing that makes us human our ability to make devices like this, which separate us from other animals?

Or is it the possibility to think ourselves into other animals?

To think larger than us.

To think not in terms of separations, but of what we have in common.

*

The fence didn't stop me going downhill.

I walked down the path – there – and found myself at the foot of this geological feature, or what's referred to by the sign as a 'geological monument'.

Looking at the layers of marl, sandstone, and clay that have been laid down, and then laid bare, on this hill.

*

What do I mean when I talk about language, intelligence, and the other?

By language I'm thinking about *Lingua franca*.

I've pulled something here a long way.

I've carried it from the Mediterranean.

It doesn't really belong here in the fields of Limburg, and yet it still seems to resonate with me; I can't stop it going through my head.

From the eleventh until the nineteenth centuries, there was a language that lived at sea, and occasionally in ports around the Mediterranean, called *Lingua franca*.

Today, a *lingua franca* means any kind of bridge language or pidgin, but for eight hundred years it had a very specific meaning.

It meant the language of the Mediterranean, of sailors and traders.

It started as a kind of Italian-Venetian-Genoese pidgin with Turkish, and expanded to include elements of Catalan, of Occitan, and of the Berber languages of North Africa, of Greek, and of Arabic.

It was a language that was used by people of every nation in order to communicate.

It was almost never written down; almost no written fragments of it survive, apart from in a few comic operettas and letters of note between merchants in Italy and North Africa, but it was clearly widely spoken and constantly changing.

A quality of a pidgin is that it is always in flux.

It's always changing.

It's always capable of change.

*

I've been thinking about *Lingua franca* because I've been trying to understand what it is for language itself to change; the relationship in particular between language and intelligence, and how it allows us to move forward, and particularly to think differently.

One of the other names for *Lingua franca* was *Sabir*, which, in *Lingua franca*, is the verb 'to know'.

Verbs in *Lingua franca*, like other pidgins, don't decline, so it means 'I know', 'you know', 'he/she/it knows'.

It can be interrogative – *sabir?*

Do you know?

Do you understand?

And so over time *sabir* became also the greeting in *Lingua franca*, the equivalent of 'hello', because when you met someone new you'd say: *Sabir?*

Do you understand?

Can we understand each other?

Can we communicate?

It's a kind of handshake.

A moment in which two people, who don't know if they understand each other, establish a mode of communication that's different to both the languages they started in.

That is different to their starting point.

That actively moves them forward.

I started on this path by thinking about artificial intelligence, particularly its applications to language.

How increasingly artificial intelligence is being used to translate between different human understandings; between different human languages, so that humans no longer have to understand one another.

The machine can intercede between us.

The machine stands between us and we have to place our trust in it.

While there are many potential benefits to us, in doing so, ultimately we are lessened by this encounter.

We lose our ability to think in terms of the other when artificial intelligence is something which intercedes between us, rather than helping us to understand, or to educate us.

*

In this way, artificial intelligence performs the role of the gate on the hilltop.

It says: the machine's understanding of this world is not for you to access.

You can take the data, do with its exhaust what you will, but you will not learn directly, bodily, from this encounter.

You cannot sense this directly.

I refuse to believe that this is the case.

I believe we can sense and understand these things directly.

I don't believe that this negates the benefits of technology.

I believe that there is another role for new machines, for new inventions, to play in our form of understanding.

*

I've brought something else with me from the Mediterranean.

It's this: the form of the octopus.

I've been thinking about the octopus quite a lot lately.

The cephalopods – which include octopuses, squid, cuttlefish – go back six hundred million years before there's a common ancestor with the human.

Our closest ancestor – our closest relationship with the cephalopods – six hundred million years ago, is some kind of blind flatworm.

An incredibly basic, simple creature, with none of the higher neural or motor functions, or even the senses, that both us and the cephalopods possess.

But the cephalopods do have eyes; they have eyes remarkably similar to ours.

They've evolved entirely separately.

They are close in the wavelengths they understand, but they have come about by an entirely separate process.

The eye evolved twice: in the mammals and vertebrates, and in the cephalopods, entirely separately.

Likewise, the cephalopods possess a form of intelligence which we do not yet fully understand.

If the eye evolved separately – twice – it is equally possible that the mind evolved separately – twice.

Cephalopod brains are medium-sized relative to the size of their body, yet are different: they extend into their arms.

Their entire neural networks extend throughout their bodies.

They feel, sense, see, and thus understand the world radically differently to the way we do.

To encounter cephalopod intelligence is to encounter an alien intelligence.

An intelligence that is radically different to our own; and yet, nonetheless, exists and shares the world with us.

*

After six hundred million years of separation from one form of intelligence, we are right on the verge of encountering an entirely new one.

Artificial, or machine, intelligence, is coming.

It's going to be real soon, and we're not going to understand it, truly, any better than we understand the octopus.

We are about to create new aliens amongst us.

We have no sense of what it is they are going to do to us.

And all the ways we currently think about them - as intercessors, as tools, as apparatuses – which are used to keep us apart from one another, to replace our faculties, to supercede us, are the wrong way to think about them.

They are going to be damaging to us because they will join the long line of technological tools which have been used primarily for oppression for the last hundred, if not a thousand, if not six hundred million years.

I believe there must be another way to think these technologies.

To think of artificial and machine intelligences less as intercessors, less as servants, tools, or weapons, but as other new voices.

To think of them as adding to the cacophony of non-human voices and intelligences that surround us.

It seems to me significant that just at the moment in which we are creating these new forms of almost toy intelligences - artificial only in the sense that they are new and have not yet bedded in to our awareness – just at this moment we are also starting to

acknowledge the intelligence of non-human creatures.

We are starting to see in cephalopod behaviours types of complex thinking and knowledges that cry out to be called 'intelligent'.

And even deeper into ecosystems, we are understanding the ways in which trees communicate with one another; the way plants spread complex messages across deep networks of chemical and pheromone communication.

Intelligence, it increasingly appears, is not merely limited to animals, or to individual plants, but is itself possibly a kind of network, which exists as connections between things, bridges and communications across them, rather than purely reflex motions within individual brains.

This, then, is my hope for artificial intelligence.

Rather than coming between us, it may allow us to see the intelligences which have surrounded us all along.

That machine intelligence may join the growing choir of voices, thoughts, actions, and agencies, which surround us at all times, if we only choose to stop and listen to them.

When two sailors met at sea, they said to one another:

Sabir? Sabir?

Do you understand?

Can you hear?

Can we talk to one another?